

南インドにおける「楽聖へのまなざし」：
「楽聖の慰霊祭」をめぐるローカル・ポリティクスに着目して
小尾 淳、国立民族博物館外来研究員

【要旨】

本発表の目的は、20世紀の南インド、タミル地方（図1）の音楽社会を背景に「楽聖の慰霊祭（以下、アーラーダナー）」をめぐるローカル・ポリティクスに着目し、「音楽」に付随する文化的側面に関心を寄せる人びとの動向を通して価値観の変化を捉えることである。インドにおいて、「作曲家」の多くは哲学者や思想家でもあり、その中でも特に音楽の才能に優れ、奇跡的なエピソードに彩られた者が「楽聖(saint composer)」とみなされている。本発表ではこの「楽聖」に対する崇敬を「楽聖へのまなざし」として概念化した上で、楽聖の表象やその作品に「資源」としての価値を見出すバラモン音楽家の主体的な動きに焦点をあてる。比較的新しく開始された楽聖のアーラーダナーが周辺社会を巻き込む様子を描き、結論として音楽界全体との相互関係を明らかにする。

民族音楽学者の寺田吉孝が「バラモンのイメージ操作」と指摘するように、社会階層で頂点に位置する司祭階級のバラモン・カーストは音楽実践や研究だけでなく楽聖の表象の明示化にも関係してきた（注1）。特に南インド古典音楽の圧倒的なレパートリーを占める三楽聖（図2）は全員バラモンであったことから、イメージ像の明示化は今日の「古典音楽」が神聖であり、かつバラモンの伝統であるという印象を強めた。

さて、20世紀後半以降、楽聖の偉業を讃えるアーラーダナーがインド国内外で盛んに行われている現象が見られる。アーラーダナーとは本来、神に対する礼拝式であるが、生前に解脱したとみなされる者に対しても行われ、楽聖の場合は儀礼に音楽祭が伴うことが多い。歴史学者の井上貴子は、100年以上続く楽聖ティヤーガラージャ（1767-1847）（図2中央）のアーラーダナーが音楽家や信徒らを巻き込んで南インド最大の音楽祭として成功したことを受け、これをひな形とした類似企画が次々に行われるようになったことを報告している（注2）。

こうした「亜流」のアーラーダナーの一つである、楽聖ナーラーヤナ・ティールタ（1650-1745）（図3）のアーラーダナーは、1964年に開始された。主催者のバラモン音楽家A氏は、ナーラーヤナ・ティールタと名前が酷似した、自身の出身地T村に祀られているローカルな聖者を混同し、アーラーダナーを強行した。その存在がメディアを通じて広まると、近隣村や他州の団体が楽聖に縁の深い土地として名乗りを上げ、ローカルな論争が展開した。A氏は対策として楽聖のイメージ像を新たに視覚化し（図3）、楽曲を再現して記譜化するなど「埋もれていた」楽聖の歴史を再構築すると共にT村との結びつきを強化していった。結果として、ナーラーヤナ・ティールタを音楽史の主流に位置づけることに成功し、主催者自身も「伝統の担い手」としての地位を獲得した。

結論として次の点が指摘できる。第一に、楽聖に対するまなざしの変化である。従来の楽聖に対する漠然とした崇敬を越え、文化的構築物を生み出すツールとして、その表象や作品に「資源的価値」が見出された。第二に、楽聖の表象がもつ役割と機能の変化である。20世紀前半に三楽聖のイメージが明示化され広く共有されたことにより、それは音楽界の象徴的役割を担うと共に、音楽界におけるバラモンの優位性を強化する機能をもってきたといえる。第三に、音楽界全体との相互恵与である。新たな楽聖の「発見」や「再評価」は、限られた楽曲レパートリーに依拠する音楽界でコンテンツの増加に寄与し、南イン

ド古典音楽の文化的生命力を活性化させてきたといえる。

注1 Terada, Y. 2008 Tamil Isai as a Challenge to Brahmanical Music Culture in South India. *Senri Ethnomusicological Studies* 71: 203-226

注2 井上貴子 2006 『近代インドにおける音楽学と芸能の変容』 青弓社。



図1 インド・タミル地方

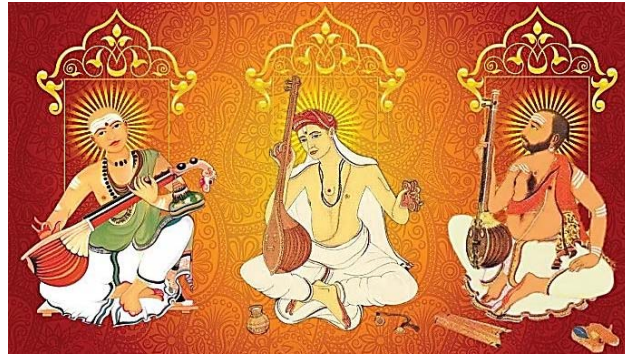


図2 南インドの三楽聖のイメージ像

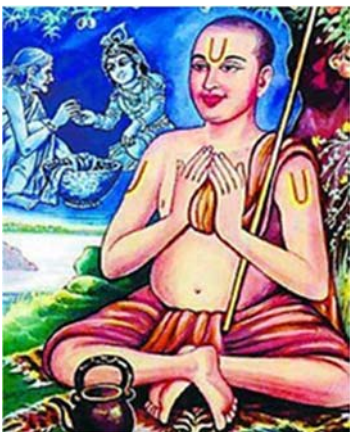


図3 楽聖ナーラーヤナ・ティールタのイメージ像